

学びのイノベーション事業及びフューチャースクール推進事業の実施に係る
京都市地域協議会第4回会議

1 日時

平成 24 年 11 月 21 日（水）14：00～16：00

2 会場

京都市立桃陽総合支援学校会議室

3 次第

(1) 開会

(2) 委員・オブザーバー紹介

(3) 議事

ア 平成 24 年度事業実施状況報告等

①平成 24 年度事業実施状況概要

②総務省への報告事項（平成 24 年度中間報告書）

③前籍校との交流

④「リモート・コンサートホール・システム」開発

※15:15 から本校・府立分教室間でのデモンストレーション

⑤アンケート結果等

⑥事業開始以降 1 年間の振り返って

イ 協議，指導助言等

ウ その他

(4) 閉会・挨拶

京都市地域協議会 第4回会議録（概略）

(1) 開会

(2) 委員紹介

- 今回初めて出席された委員・オブザーバーを紹介
黒田委員，森本委員，新谷オブザーバー，PTA 分教室代表

(3) 議事

ア 平成 24 年度事業実施状況報告等

①平成 24 年度事業実施状況概要の報告

- 桃陽総合支援学校研究主任から説明
 - ・機器導入 1 年間の取組
 - ・教員研修，ICT 支援員の活動
 - ・授業への取組（本校と分教室・病室を結んだ協働学習など）
 - ・教室に入れない児童生徒に対する ICT を用いた移行支援
 - ・ICT 機器を授業のなかで普通使いができるようになった。
 - ・学習発表会や生徒集会での取組（今年度は全校で一緒に行う）

②総務省への報告事項・平成 24 年度中間報告書についての報告

- 情報化推進総合センター指導主事から説明
 - ・実証テーマ等への取組
 - ・ICT 支援員
 - ・児童生徒の転入出が多く，半年で 6 割が入れ替わっている。
 - ・京都市以外から転入してくる児童生徒に対応する学習指導について
 - ・アクセスポイント監視システムの構築
 - ・タブレット PC への評価
 - ・ソフトウェアの活用状況，自学自習システムの利用状況
 - ・年度始めにおける ICT 環境の設定に関して

◆研修への教員の参加状況はどうか？

- ・導入時には全員参加の研修を行ったが，あまり効率的でないこともあり，減らしてきている。
- ・スポット研修などの機会に，教員自身が学習指導等に必要な部分のスキルアップを心がける。
- ・教員個別に ICT 支援員に尋ねたり，教科内容について指導主事に指導を仰いだりしている。

◆TV 会議システムでの会話の成立のさせかたはどうしているか？

- ・病室も含めて多数の児童生徒が参加すると混乱してしまう。使い方やルールについてはこれからも検討する必要がある。

③前籍校との交流についての報告

- 情報化推進総合センター指導主事から説明
 - ・最近の移行支援について説明
 - ⇒ 交流等により，桃陽の児童生徒だけでなく前籍校の子どもたちにも高い効果が得られている。
 - ・前籍校の ICT 環境に関して

○中東校長から転出後の児童生徒の状況について説明

- ・前籍校からも移行支援の効果があったと評価
- ・今の様子が分かることによって、教員や保護者の安心感がある

◆小学校と中学校との違いはどうか？

- ・本校と分教室の小中学生の比率が異なる。(分教室では中学生が少ない)
- ・本校では中学部が前籍校との交流を検討している。
- ・中学生は思春期なりの思いがあって、TV 会議を通じた交流については微妙である。いろいろな交流の仕方について検討する必要がある。

④「リモート・コンサートホール・システム」開発について

○本校・府立分教室間でのデモンストレーション

- ・エーデルワイスの合奏（本校はピアノ、府立分教室はソプラノリコーダーを演奏した）
- ・少し遅延があったが、良好な音質で合奏ができた。

○情報化推進総合センター指導主事から開発状況について説明

◆これ以上遅延を短くできるか？

- ・劇的に遅延を減らすことは難しい。

◆音楽を使ったコミュニケーション活動は達成できるだろうと思われる。

◆専門的にみると、すばらしく高速通信できているようである。

◆交流では音声が重要。声が聞こえにくいとモチベーションが低下してしまうので、本システムにはとても期待している。

⑤アンケート結果等について

○桃陽総合支援学校研究主任から説明

- ・転入出が多いこともあり、学習集団としての全体の変容を追跡することが難しく、数値としての統計的な意味が薄くなる。今後は個々の児童生徒の変容の調査・分析を行いたい。
- ・児童生徒、保護者、教員の思いの変化も捉えていきたい。

⑥事業開始以降1年間を振り返って

○中東校長から

- ・教員が肩肘張らずに ICT を授業で活用することができるようになったとともに、授業のどの場面で活用すればよいかという選択ができたり、子どもたちの姿を見て、どんどんアイデアが湧いてきて、使ってみたら予想以上の効果が見られたりすることもあった。
(読書週間でのコラボノートを活用したブックトークの取組など)

○分教室 PTA 代表から

- ・子どもたちが ICT などを通じて人とつながることで、治療に対しても効果があると思う。
- ・自分と同じように頑張っている子がいて、つらいのが自分だけではないと思えたときに、人間として生きる力が湧いてくる。
(他の保護者からの御意見や御感想をいただいた)

◆医療情報学会での発表など、教育だけでない分野でも着目されているのではないか。

⇒ 同じような取組をされている病院などからは、桃陽分教室の幅広い ICT 活用や病院ネットワークの活用に関して尋ねられることがあった。関係者の間では、こうした取組が大きな効果と呼ぶことが伝わったように思われる。

ウ 協議，指導助言等

○各委員・オブザーバーからの御意見

- ・ TV 会議システムで前籍校との交流は教育効果が高いと思われる。
- ・ ICT といったデジタルの部分と人のつながりといったアナログの部分で，バランスや融合をきちんと図っていく必要がある。
- ・ 子どもの状況もさまざまなので，授業等では使えるところで適切に使えばよい。
- ・ 病院でも道具としてのネットワークは大いに使われるべき。その上で熱意をもって道具を使う人がいて，さらにそれをサポートする体制をもっていることは大きい。治療への効果があることも含めて大きな病院にも浸透していけばよいと思う。
- ・ 授業時間中に TPC を使っている子，使っていない子の両方がいてよい。ツールとして適切に使える力が重要。
- ・ 休み時間や放課後の活用についても課題になるのではないか。
- ・ ICT を活用することの負の部分が出てきたときの対応が，今後必要になってくるだろう。
- ・ 顔が見える人とのつながりや，生きる力につながるための活用が大切である。
- ・ 失敗から学ぶために失敗事例を出していくことも重要になるであろう。
- ・ 学習機の大きさなど，ICT を使う上での既存の教室環境についても考えていくべきである。

(4) 中東校長から閉会の挨拶

「研究を進めていく上で，実際にはいろいろな課題もでてきている。この事業が終わった後にもつながるような実践を積んでいきたい。」

第4回会議 参加者

1 地域協議会委員等

(敬称略)

氏名	所属・役職
滝川 国芳	国立特別支援教育総合研究所統括研究員【座長】
山村 節子	全国特別支援学校病弱教育校長会副会長，全国病弱虚弱教育研究連盟理事長 (静岡県立天竜総合支援学校長)
桶谷 守	京都教育大学教育支援センター教授 (コミュニティ・スクール研究推進委員長)
黒田 知宏	京都大学准教授，京都大学医学部附属病院医療情報企画部副部長
神月 紀輔	京都ノートルダム女子大学心理学部准教授
大畑 眞知子	京都市立藤城小学校長 (京都市小学校長会副会長)
森本 哲	京都市立松原中学校長 (京都市立中学校教育研究会情報教育部会会長)
藤谷 貞之	京都市立鳴滝総合支援学校長
(氏名 略)	京都市立桃陽総合支援学校保護者代表 (PTA会長) [公務のため欠席]
柴原 弘志	京都市教育委員会指導部長【副座長】 [公務のため欠席]
川井 勝博	京都市教育委員会指導部情報化推進総合センター所長【プロジェクトリーダー】
中東 朋子	京都市立桃陽総合支援学校長

2 オブザーバー

総務省 近畿総合通信局 情報通信部 情報通信振興課長 新谷 壽磨

京都市立桃陽総合支援学校 P T A 分教室保護者代表

3 校内推進委員会(プロジェクト)

京都市立桃陽総合支援学校教員

京都市教育委員会 総合育成支援課指導主事

京都市教育委員会 総合教育センター指導主事

京都市教育委員会 情報化推進総合センター指導主事

4 その他

ICT 支援員

西日本電信電話株式会社京都支店

エヌ・ティ・ティ・コム チェオ株式会社

株式会社ナリカ

株式会社ピーパルシード

5 事務局

京都市教育委員会 情報化推進総合センター